



日本キリスト教団
三軒茶屋教会
http://sanchurch.jp/

三軒茶屋 教会通り

第56号 2018年2月発行

〒154-0024

東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5

TEL/FAX:03-3418-4933

発行:三軒茶屋教会 広報部

「父なる神はわかる。子なるキリストもわかる。でも、聖靈についてはよくわからない」。教会生活が長いキリスト者からも聞かれる言葉だ。主イエスは「神は靈である」(ヨハネ4:24)と教えておられる。その神を信じているが、聖靈についてはよくわからないとは、その後で何が起こっているのだろうか。まず考えられるのは、「靈」という文字がもたらす直感的な印象だ。「靈」という漢字は、「雨」と「巫」から成る。雨のように天から降つてくる死者が語る言葉を受け止めて、生きている人間に語り直している。

青森県は恐山の「イタコ」が文字としての「靈」な

どだ。つまり、漢字での「靈」は、死者の領域からの言葉や意志を表している。しかし、キリスト教信仰としての「靈」に死者の概念はない。聖書における「靈」とは、「息」や「風」と同義であり、目には見えなくとも力ある働きをなす存在のことである。目には見えないけれども人間の力をはるかに凌駕する確かな存在を感じる。それが主イエスが教えた「靈」を信じる信仰であるはずだ。

我は聖靈を信す

牧師 伊藤英志



聖靈を信じる我とは、十
字架と復活の文化とは全く
異なる別次元の領域を指向
する信仰を表している。

によって選ばれて取り分けられる。それが「聖なるもの」とされる。したがって、「聖靈」とは、目に見えない諸勢力の中にある、「靈」は見えない「靈」は、常に見えて、「靈」は慰めを必要とする死者たちと同等・同質として別格に取り分けられている「見えざる力」である。ところが、日本古来の理解では、「靈」は慰めを必要とする死者たちの領域であり、「聖」は生きている者たちの日常のための清い生の領域である。もし生きている者が死者の靈への慰めを怠ると、恐るべき夕々

では、「聖」はどうだろう。「聖」という文字は、和語では「ひじり」と読み、もともとは農耕を中心とする生活共同体を秩序付ける暦を取り決めるために地域毎にたてられた人、「ひじりびと」を意味していた。今日、「聖」は不思議な活力や開運をもたらす「パワースポット」に漂うような、清らかで神聖な見えざる雰囲気や力と言うと通じやすい。一方、聖書での「聖なる」とは、取り分けられたものという意味がある。似たようなものがある中で、神

は聖靈を信す」とは、「生」と「死」が起ると信じられている。つまり、日本古来の理解では、「聖」と「靈」とは互いに相容れない対極的な位置付ける。ここから生じる感覺のズレが「聖靈についてよくわからない」という現実を決してよくわからない」という現実を引き起こしている。この感覺は誰かが教えたものでもない。自然と伝わり、誰にでも強く教会においても引き起こしている。したがって、使徒信条にある「私は聖靈を信す」とは、「生」と「死」について、日本が古来から受け継ぐ固着していく文化の浸透力による。

えた聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の生命を信じようとする信仰に立ち戻ろうとする。文化の力や人間業では実現不可能な神の御業をこそ信じる。そうした「我」が召し集められ群れとなるのがキリストの体なる教会である。聖靈を信じる確かな信仰があつてこそ、その群れは教会であり続ける。生き生きとした聖なる力に満ちている教会であり続けるのだ。